The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幼児期における死の理解に関する研究 : 理由づけ質問による発達的変化の検討
Author(s)	辻本, 耐
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56030
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　辻本　耐　　）	
論文題名	幼児期における死の理解に関する研究 ―理由づけ質問による発達的変化の検討―

論文内容の要旨

第1章　子どもの死の理解に関する研究の概観と問題提起

子どもの死の理解に関する研究は、死の概念に焦点を当てた認知発達研究の文脈において行われてきた。この死の概念とは、死の生物学的な特徴を表したものであり、機能停止（生命に特徴づけられた機能が停止すること）、不可逆性（ひとたび死ぬと再び生き返らないこと）、普遍性（生物は必ず死ぬこと）といった3つの概念が主に用いられてきた。そして、伝統的に子どもがこれらの概念を何歳頃に理解するのかという点に注目が集まり、5～7歳頃にかけて、これらの概念を理解するということで大方の合意が得られている。しかし、いくつかの研究において、5歳以前の子どもであっても一部の死の概念を理解しているとする報告や、6歳頃に全ての死を理解しているという結果が示されている。こういった早期の発達を報告している研究には、「はい－いいえ」や「AかBか」の択一式で答えられるようなクローズド質問のみを用いた測定が行われているという特徴が見受けられる。調査対象が子どもである場合、言語能力に依存する割合が低いという利点から、このクローズド質問が採用されることが多い。しかし、この方法で測定される理解とは、あくまで理解しているかどうかという結果であり、理解の質的な差異まで測定されているわけではない。そこで、この問題を解決するために用いられているのが理由づけ質問である。この理由づけ質問は、クローズド質問を補足するものであり、子どもがどういった知識にもとづいてクローズド質問に回答したのかを明らかにすることができる。さらに、これら2つの測定方法の結果を踏まえると、子どもの死の理解に、クローズド質問に正答できない理解の水準（第1水準）、クローズド質問に正答できるが、その根拠となる知識が適切ではない、もしくは言語化できない理解の水準（第2水準）、クローズド質問の正答に至った理由を説明でき、その根拠となる知識が適切なものである理解の水準（第3水準）の3つを仮定することができる。近年の認知発達研究では、子どもは明示的な理解ができるずっと以前から世界についての暗黙の理解をもつことが示されている（Gelman, 1979）。この明示的レベルの理解とは、子どもが行ったある種の自発的説明にもとづいて評価される理解、つまり、現象に対する説明を伴う理解である。これに対して、暗黙的レベルの理解とは、子どもがそういった説明をできないものの、何らかの知識にもとづいて、提示された選択肢の中から、適切なものを選択することで評価される理解、つまり、現象そのものの判断に関する理解である。これら2つの理解レベルを、先の3つの水準に当てはめると、暗黙的レベルの理解が第2水準、明示的レベルの理解が第3水準に対応していると考えられる。本論文では、クローズド質問と理由づけ質問によって、死の理解に3つの水準（レベル）を仮定し、早期の発達が指摘されている幼児期における死の理解を検討することを目的とする。

第2章　幼児期における死の理解の検討（研究1）　－ クローズド質問を用いた検討 －

研究1の目的は、クローズド質問のみを用いた測定を行い、幼児期における高い正答率が認められるかどうかの確認を行うことである。大阪府内にある私立A幼稚園に通う年少児から年長児までの181名に対して面接調査を行い、機能停止・不可逆性・普遍性の3つの死の概念と、死に対するイメージおよび死後観について尋ねた。分析の結果、全学年を通して、機能停止と不可逆性において、高い正答率が認められたことから、先行研究と同様の傾向が確認された。その一方で、普遍性については、正答した年長児の人数の割合が有意に高かったものの、その割合は半分であったことから、幼児期においては理解することが難しい概念であることが示された。死に対するイメージについては、否定的な感情に関する反応が多く認められ、死後観については、生と死が弁別された表現とそうでないものとが確認された。そして、これらの反応において、年少児と年長児の人数に偏りが認められたことから、より学年が高い年長児において、死が否定的に捉えられ、生と死が弁別された表現が用いられる傾向が示された。

第3章　幼児期における死の理解の検討（研究2～4）　－ 理由づけ質問を用いた検討 －

第3章では、クローズド質問と理由づけ質問によって、死の理解を3つの水準（理解していない–暗黙的レベルの理解–明示的レベルの理解）に分けて、その発達的変化を踏まえながら、子どもがそれぞれの水準に到達する時期を明らかにしていく。また、子どもの死の理解を検討している研究の多くは、人間の死を想定している場合が多いが、研究2～4では、動物を対象とした死の概念についても検討することとした。

研究2および研究3では、大阪府内にある私立B幼稚園の年少児から年長児の113名に対して、人間および動物の死の2つの場面に分けて面接調査を行い、機能停止（動作の停止：機能停止1、機能の停止：機能停止2）、不可逆性、普遍性の3つの死の概念について尋ねた。

まず、研究2では、理由づけ質問から得られた反応に対して内容分析を行い、どういった反応が理由づけとして適切か、適切でないのかを明らかにした。クローズド質問に対する回答、場面、概念ごとに理由づけ反応を整理した結果、場面と概念に共通して、クローズド質問に正答した場合の反応から19のカテゴリ、誤答だった場合の反応から11のカテゴリが見いだされた。そして、先行研究を参考にして、クローズド質問に正答した場合から10のカテゴリ、誤答だった場合から2つのカテゴリを理由づけ反応として適切なものと判断した。

次に、研究3では、研究2の結果を踏まえて、場面・概念ごとに、子どもの反応を3つの水準に分類した。子どもの死の理解をレビューしたSpeece & Brent（1984）は、与えられた課題に対して適切な理解を示す子どもが少なくとも50%いる年齢を子どもが死を理解している年齢と定義している。この基準を適用した結果、年少児および年中児はまだ暗黙的レベルの理解であったが、年長児は両場面の普遍性を除いたほとんどの概念を明示的に理解していることが示された。

また、各水準を得点化して、概念ごとに、学年3（年少児・年中児・年長児）×場面2（人間場面・動物場面）の2要因反復分散分析を行った結果、学年が上がるとともに死の理解が進むという発達傾向と、一部の概念において、人間よりも動物の死の理解が進んでいるという結果が示された。ただし、研究3の結果において、年長児の第3水準に占める割合がとくに高い概念が認められた。この理由として、調査の導入として子どもに提示した死を主題とした紙芝居の影響が考えられた。

そこで、研究4では、調査の導入において紙芝居の提示を行わず、あらためて追試的な検討を行うこととした。調査対象は、大阪府内にある私立B幼稚園の年中児と年長児の99名、測定対象とした死の概念は研究2・3と同じであった。研究3と同じ手続を用いて、場面・概念ごとに、子どもの反応を3つの水準に分類した。その結果、第3水準に占める人数の割合を確認すると、特定の概念における高い人数の割合は確認されず、全体的に4割以下であり、幼児期における死の理解は、暗黙的レベルであることが示された。しかし、研究3と同じく、各水準を得点化して、概念ごとに分散分析を行った結果、研究3と同様の発達傾向と一部の概念に場面による差異が認められた。

第4章　幼児期における死に対する感情の評価の検討（研究5）

研究1の死に対するイメージの結果において、より学年が高い年長児において、死が否定的に捉えられる傾向が認められた。この結果を受けて、研究5では、子どもの死に対する感情評価の発達的変化について検討した。なお、研究5は、研究2・3とともに行われ、人間および動物の死の2つの場面に分けて調査を行った。調査に際しては、人間と動物の死を主題とした2つの紙芝居を導入として提示して、その登場人物が死んだという内容を手がかりに、死そのものに対する対象児自身の感情について尋ねた。感情の評価には、肯定的・否定的な感情を表すイラストが描かれた6枚のカードを提示して、自身の感情と当てはまるものを子どもに選択させた。子どもが選択したカードを得点化し、肯定的感情および否定的感情ごとに、学年3（年少児・年中児・年長児）×場面3（ベースライン・人間場面・動物場面）の2要因反復分散分析を行った結果、死に対して肯定的な感情評価を行わず、否定的な感情評価を行うようになるのは4・5歳児に該当する年中児以降であり、3・4歳時に該当する年少児においては、死に対してそういった感情評価を行わないことが示された。また、人間場面と動物場面を比較した場合、明確な違いは認められなかった。

第5章　幼児期における死の理解に関わる要因（研究6）–死別場面における親による死に関する説明の内容分析–

研究6では、子どもの死の理解に関わる要因として、親から子どもへの死に関する説明の内容を検討した。とくに、そういった会話が生起しやすいと考えられる死別場面に注目して、親が幼い子どもに対してどういった死の説明を行っているのかを明らかにした。研究1で調査を行ったA幼稚園に通う園児の保護者192名を対象に質問紙調査を行った結果、死別場面における親から子どもへの説明を含んだ43の事例を収集し、その内容から親の発話内容を構成する16の概念を抽出した。次に、概念間の関係性を検討した結果、3つの分類を確認することができた。それぞれの分類を検討したところ、間接的な死の説明、生や死の特性の説明、直接的な死の説明といった特徴があることが明らかとなった。これらの分類と子どもの理由づけ反応とに類似したものが多く認められていることから、死に関する親の説明が子ど

もの死の理解に影響を与える要因の1つである可能性が示唆された。

第6章　総括的討論

本論文では、幼児期の死の理解を暗黙的レベルと明示的レベルの2つのレベルに分類し、その発達的変化を検討するとともに、幼児期の子どもが死を理解しているかどうかを明らかにした。そのうえで、人間と動物の2つの場面の比較検討を行うとともに、死の感情的な側面や親からの関わりについても焦点を当てることで、包括的な検討を行った。本研究の結果から、学年が上がるとともに、死の理解が深まるという先行研究の知見と一貫した発達傾向が示された。しかし、死に関する文脈を提示した場合（研究3）、年長児は多くの概念において明示的な理解を示すものの、より厳密な条件を設定した調査（研究4）では、いくつかの研究が指摘しているような早期の発達は認められず、本研究が仮定した明示的レベルの理解に至るのは、もう少し後の児童期初期である可能性が示唆された。5・6歳児に該当する年長児になると、そういった文脈を読み取ることはできるものの、文脈の助けを与えられなければ、学年として、評価基準（50％）に達することはなく、幼児期において、現象に対する説明を伴う理解がそれほど容易なものではないことが明らかとなった。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　辻本　耐　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主査	教　授	佐藤眞一
	副査	教　授	金澤忠博
	副査	教　授	中谷素彦
		准教授	権藤恭之

論文審査の結果の要旨

情報社会の中に生まれてきた子どもたちは、メディアを通して幼いときから死に関する情報に接している。しかしながら、死をタブー視する現代社会において、大人たちは自ら経験することのできない死を、幼い彼らがその認知能力の未成熟さからいって死を理解することは困難と考えるだけではなく、死に関する情報や経験を制限しようとする傾向がある。このことは、幼児の精神的成長を過小評価することにもつながるであろう。一方で、超高齢社会の我が国においては、今後、幼児が近親者の死に接する機会も増加してくることは想像に難くない。特に幼児期は、緊密な母子関係から離れて幼稚園や保育園での集団生活に移行する時期であり、認知や言語などの側面が飛躍的に発達するため、死に対する認知や情動の発達も重要な意味をもつ時期であると考えられる。このような現代社会の状況を背景に、本学位論文では、幼児期に焦点を当て、死の理解の発達的変化を明らかにすることを目的として、以下の６種類の研究が行われた。

子どもの死の理解に関しては、機能停止（生命に特徴づけられた機能が停止すること）、不可逆性（ひとたび死ぬと再び生き返らないこと）、普遍性（生物は必ず死ぬこと）といった３つの概念が主に用いられて研究が行われてきた。その際の研究方法としては、「はい－いいえ」や「ＡかＢか」の択一式で答えられるようなクローズド質問のみを用いた測定が行われているという特徴がある。研究１では、まず、幼稚園の年少児から年長児を対象にクローズド質問のみを用いた測定を行い、先行研究同様に高い正答率が認められることを確認した。

研究２～４では、死の理解の発達的変化を検討するために、クローズド質問に加えて死の理由を説明できるかを理由づけ質問によって幼稚園年少児から年長児を対象に検討した。研究２では、理由づけ質問から得られた反応に対して内容分析を行い、どのような反応が理由づけとして適切か、適切でないのかが明らかにされた。研究３では、場面・概念ごとに、子どもの反応を３つの水準に分類し、適切な回答率５０％を基準に発達水準を検討したところ、年少児および年中児はまだ暗黙的レベルの理解であったが、年長児は死の概念を明示的に理解していることが明らかとなった。研究４では、これまで手続きとして行ってきた紙芝居による課題の提示を行わずに研究３と同様の調査を行ったが、同様の発達傾向が示された。

研究５では、死に対する感情評価を検討した。その結果、幼児は死に対して肯定的な感情評価はせず、否定的な感情評価を行うのは４・５歳児以降であり、３・４歳時においては感情評価を行わないことが示された。

研究６では、子どもの死の理解に関わる要因として、親から子どもへの死に関する説明の内容が検討された。その結果、子どもの理由づけ反応が親の死の特性の説明と類似していることが明らかになり、死に関する親の説明が子どもの死の理解に影響を与える要因の１つである可能性が示唆された。

子どもの死の理解に関して、３・４歳児という低年齢児までを調査対象にした研究は極めて希であり、この年齢を含めた発達変化を示唆する本論文の意義は大きい。また、理由づけ質問を行うことによって、現象に対する説明を伴う理解である明示的レベルの理解と、現象そのものの判断に関する理解である暗黙的レベルにとどまる理解の２段階が存在することを示したことは、本論文のオリジナリティと高く評価することができる。

以上より、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。